17　次の文章は、平安時代後期に書かれた物語、『夜の寝覚』の一節である。主人公である中納言は、わけあっての三女を、姉の中宮（本文中には「宮」とある）のもとに強引に出仕させることにした。三女は、新少将の名で宮仕えを始めると、中宮からは目を掛けられ、殿上人たちからも好意を寄せられるが、長らく親の庇護のもと、「家の娘」として静かに暮らしていたこともあり、社交をともなう「女房」として来訪する男性に応対するのには、なかなかめないでいた。これを読んで、後の問いに答えよ。なお、新少将の心情を汲み取るうえでは、男性たちとの関係性を理解することが肝要である。注の説明をも十分に参照すること。　　　　　　　〈九州大〉二〇二〇年度出題

　すこし立ち馴れゆくままに、人柄いと①かどあり、心ばせありてもてなしければ、宮もいとよきものにおぼし、殿上人なども心にくく思ひて、ゆかしがりいどみけれど、こよなく心上がりして、はかなく返り事すべくもあらず、引き入り、げにもてなしたり。

　雪降り、月いとく澄みたる夜、殿上人あまた参りて、戸口に、我はと思ひたる人々あまた出で居たるに誘はれて、中にまじりたり。つつましくて答へもせず、ののかたに引き入りて居たるを、など問ひ聞きて、契り定めし弁少将など、ただならず言ひかくれども、暗きにおもむきたるかたを、いとよく推し量りて、居たる東面にさりげなく尋ね寄りて、

　　「Ａ石山の峰に隠れし月影を雲のよそにてめぐりあひぬる

おぼし出づや。あはれなり」と、けはひもさまも人よりも②なつかしくなまめきて、いと忍びやかに言ひたるに、え聞き過ぐさで、

　　雲居にはすむ空もなき月なればＢ谷に隠れし影ぞ恋しき

とて、やをらすべり入りて、局にまぎれ下りて、なよらかなる物に引き替へ、の火起こして、袖に引き入れて、ひたぶるに見捨てむこともさすがに口惜しき夜のさまなれば、押し開けて、里のかた思ひ出でつつ、「親たちの思ひ掟てしにはひて、あはつけくも、もて出でぬる身のありさまかな。我が心も、立ち馴れゆくよ。『峰に隠れし』と言ひつる返り事を、いかで答へ出でつるぞ」と、Ｃうとましく思ひつづけて、

　　「Ｄ知らざりし雲の上にもゆきまじり思ひのほかにすめばすみけり

かなはざりける」と、忍びやかにながめ出でて居たれば、言ひ知らず匂ひ深く薫り満ちたる姿ぞ、寄り来る。中納言の御弟、三位中将、参り始めしよりあながちに言ひ寄りたまひしを、わりなく逃れたるが、尋ねおはしたると、胸つぶれて、まどひ引き入りぬるに、中納言、御宿直なりけるが、例の③寝覚めにわびて、立ち寄りたまひたりけるにぞありける。

（注）　○我はと思ひたる人々……殿上人たちの話し相手をする自信のある女房たち。応対に不慣れな新少将は、少し引っ込んでいる。

○契り定めし弁少将……親たちが新少将の婚約者に定めていた男性。新少将が女房たちの中にいることを知り、しきりに声をかけるが、新少将は相手にしない。

○さりげなく尋ね寄りて……主語は、宮の中将という色好みの男性。かつて石山寺参詣をした折に新少将を見初め、恋文を贈ったことがある。新少将も返事をして心惹かれる様子であったが、彼の愛情は当てにならないと考えた親たちは、身分の釣り合う弁少将を婚約者に選んだ。

○火取……をたく香炉。

問１　傍線部①～③を現代語訳せよ。

問２　傍線部Ａ「石山の峰に隠れし月影を雲のよそにてめぐりあひぬる」の歌の大意を答えよ。

問３　傍線部Ｂ「谷に隠れし影ぞ恋しき」には、宮仕えに出た新少将のどのような思いが表現されているか、簡潔に説明せよ。

◎問４　傍線部Ｃ「うとましく思ひつづけて」とあるが、新少将は自身のどのようなところを「うとましく」思ったのか、分かりやすく説明せよ。

問５　傍線部Ｄ「知らざりし雲の上にもゆきまじり思ひのほかにすめばすみけり」の歌に用いられた掛詞について説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝才気があり、

　　　②＝Ａ慕わしくＢ優美で、

Ａ＝５／Ｂ＝５

　　　③＝夜の寝覚めに苦しんで、

「苦しむ」「悩む」という表現があること。

問２　Ａ石山寺で見初めて文を交わして以来姿を隠してしまったあなたと、Ｂ宮中でめぐりあうことができた。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝５〔「文を交わした」という内容がなければ減点３。〕

Ｂ＝５〔「宮中で」がなければ減点２。〕

問３　Ａ自分は宮中に居場所がなく思われるので、Ｂかつて実家で暮らしていた自分に戻りたいという思い。

Ｂがないものは全体０。

Ａ＝５／Ｂ＝５

問４　Ａ親が弁少将を婚約者と定めていたのに、Ｂ軽率にも宮中に出仕した自分は次第に世慣れて、Ｃ心惹かれた宮の中将から歌を贈られると返歌まで詠んでしまうというＤ慎みのないところ。

Ａ＝２〔「親の意に反して」という内容であれば可。〕

Ｂ＝４〔「宮中の生活に慣れた」という内容であれば可。〕

Ｃ＝２〔「宮の中将に返歌した」ということが書けていること。〕

Ｄ＝２〔「軽々しく～してしまった」など、自分の行動を否定的に捉えている表現であれば可。〕

問５　Ａ「ゆきまじり」が「雪交じり」と「行き交じり」の掛詞。Ｂ「すめばすみ」が「澄めば澄み」と「住めば住み」の掛詞。

Ａ＝５／Ｂ＝５

「ゆき」、「すむ」の指摘ができていれば可。

【現代語訳】

　（新少将は宮中の生活に）少し馴染んでいくにしたがって、人柄はたいそう問１①才気があり、思慮深くふるまったので、中宮もたいそうよい人物だとお思いになり、殿上人なども心ひかれるように思って、会いたがり言い寄ったが、（新少将は）この上なく気位を高く持ち、簡単に返事をするはずもなく、控えめにしていて、（殿上人たちから見たら）憎らしいほどすばらしい様子に振る舞っている。

　雪が降り、月がたいそう明るく澄みわたっている夜、殿上人がたくさん参内して、戸口に、自分こそはと思っている女房たちがたくさん出てきているのに誘われて、（新少将もその）中に混じっている。気が引けて（殿上人たちに声をかけられても）返事もせず、東面の傍らのほうに引っ込んでいたところに、（そこにいるのは）誰々かなどと尋ね聞いて、（中でも）婚約者であった弁少将などは、並々でなく話しかけるが、（新少将が、弁少将を避けて）暗いほうに向かっていく（その）場所を、たいそううまく推し量って、（新少将が）いる東面になにげなく尋ね寄って（歌を詠みかける男がおり）、

　「石山寺の峰に隠れた月のように、石山寺で見初めて文を交わして以来姿を隠してしまったあなたと、雲のはるか彼方の宮中でめぐりあったことだ。

お思い出しになりますか。しみじみと愛しい（ことです）」と、物腰も姿もほかの殿上人よりも問１②慕わしく優美で、たいそうひそやかに言った声に、（相手が宮の中将だとわかって、新少将は）聞き流すことができずに、

　雲の上に居たのでは澄んだ光も見えない月なので（宮中には居場所もない私だから）、谷間のような、低い身分の実家で暮らしていた頃の自分が懐かしいことです。

と言って、静かに（奥に）すべり入って、人目を避けて局に下がって、柔らかな夜着に着替えて、火取り香炉の火をおこして、袖（の下）に引き込んで、ただただ見ないでそのままにするようなこともそうは言っても残念な夜の風情なので、遣戸を押し開けて、実家のほうを思い出しながら、「両親が思い定めたことには背いて、軽率にも、（宮仕えに）出てしまったわが身であることよ。（身だけでなく）私の心も、（宮中の生活に）馴染み始めていることよ。（宮の中将が私に対して）『峰に隠れし』と詠んできた（歌の）返歌を、どうして答えたりしたのか」と、いやなことに思い続けて、

　「今まで知らなかった。空に雪が交じるように宮中に行き交じって、雲の間から見る月の光が、澄んだ光を見せる時には澄んでいるように、意外なことに、住めば住めるものであるよ。

思いどおりにならないことだ」と、ひっそりと物思いに沈みながら外の様子をうかがっていると、言いようもなくにおい深く香りに満ちている直衣姿（の人）が、寄ってくる。中納言の御弟、三位中将が、（新少将が宮中に）出仕し始めた頃から強引に言い寄っていらっしゃったのを、（新少将は）無理に逃れていた（のだ）が、（とうとう）尋ねていらっしゃったのだと（思って）、心乱れて、あわてて引っ込んだところに、（まさにその）中納言が、（その日は）御宿直であったのが、いつものように問１③夜の寝覚めに苦しんで、お立ち寄りになったのであった。